

【書評】

デヴィッド・ハーヴェイ「資本の謎」

——資本の地理学と地理学の資本を読む——

『資本の〈謎〉世界金融恐慌と21世紀資本主義』

デヴィッド・ハーヴェイ著, 森田成也・大屋定晴・中村好孝・新井田智幸訳
(作品社, 2012年2月)

勝 俣 誠

“Why had nobody notice that the credit crunch was on its way?”

2008年11月, ロンドン スクール オブ エコノミックス (LSE) を訪問したエリザベス女王は, 教授陣になぜ誰も今回の信用危機を予測できなかったのですかとこう聞いた。

慌てた英国アカデミーは2009年6月に各界の専門家を集めたフォーラムを開催し, 女王の質問に答えるべく書簡を出した。

その回答は, 危機の可能性はすでに指摘されていたが, それが何時かというタイミングは予想できなかったとし, 原因はシステムック・リスクであるというものであった⁽¹⁾。

この書簡によれば, このシステムック・リスクとは最高の数学的知見で金融活動の個々の部分でのリスク計算に終始し, 危機の全体像を掴めなくなった状況で生じたリスクである。その結果, 金融関係者も政治家も個人投資家もこのハイ・リターン, ハイリスクの行く先を案じず, 楽観的になってしまっていたとしている。そして, 本来, 危機の予兆の段階で金融当局は「パーティーの最中に, パンチボールをさっとテーブルから取り下げるべきだったかも知れない」と反省している。

この説明によればシステムック・リスクは, 金融取引の透明性を増し, 金融当局が監視機能を強化すれば避けられるという単なるリスク・マネー

ジメントの次元に位置づけられている。

しかし, より根本的には, なぜこうした信用危機が, 現代社会ではくり返されるのかという問いであろう。すなわち現在経験している危機は実は資本主義そのものが抱え込んでいるシステムック・リスクではないかという問題提起である。

この問いに対して, 今日多くの大学で教えられている新古典派の経済学や金融理論では答えることが出来ない。例えば前述の英国の女王への英国アカデミー名による書簡説明に対して, ポストケネジアンを経済学者トーマス・パレイはすでに2006年に今回の危機を予測していた論文が複数あり, ただメインストリームのエコノミストが耳を貸そうとしなかった偏狭で, 傲慢になっていたという職業上の社会学的破綻 (sociology of economics profession) が原因とした書簡をやはり女王に送っている⁽²⁾。実際, 資本主義の危機分析には, 資本を単に会計学や経営学のように資産や設備財を価格として表現するのではなく, その運動が不可避的に生む時代の社会の関係性まで踏み込まなければならぬからだ。

21世紀初の大金融危機を前に, この資本の内包する特性を, この運動ないし流れにおいて明らかにしようとしたのがデヴィッド・ハーヴェイの「資本の謎—世界金融恐慌と21世紀資本主義」(森田・大屋・中村・新井田訳) である。

本書は8つの章とペーパーバック版あとがき及

び経済学者伊藤誠の日本語版解説からなっている。

- 第1章 なぜ金融恐慌は起こったか？
(The Disruption)
- 第2章 どのように資本は集められるのか？
(Capital Assembled)
- 第3章 どのように資本は生産をしているのか？
(Capital Goes to Work)
- 第4章 どのように資本は市場を通るのか？
(Capital Goes to Market)
- 第5章 資本主義発展の共進化
(Capital Evolves)
- 第6章 資本の流れの地理学
(The Geography of It All)
- 第7章 地理的不均等発展の政治経済学
(Creative Destruction on the Land)
- 第8章 何をなすべきか？ 誰がなすべきか？
(What is to be Done? And Who is Going to Do It?)

この章の展開から察せられるように、冒頭に挙げたなぜ金融恐慌は起こったのかという問いに対して、単に膨大な債権を巧妙に証券化した金融商品とか、成功報酬を求めた過度のリスク・テッキング行動とかいった規制緩和の生んだマイナス面を指摘するだけでは、納得の行く答えとはならないとするのが本書の基本的な立場である。それは何よりも訳者が、今日の危機を恐慌とも訳していることに現れている。

日本近代史では1920-30年代の昭和恐慌、農業恐慌、世界史では、1929年のニューヨーク株式取引所の株価暴落に発する大恐慌があり、いずれも政治・社会を大きく変動させた出来事であった。すなわち、今回の金融恐慌は過去の米国でエンロン社の破産やドットコム・バブルが引き起こした金融界の混乱と比し、規模の異なる資本主義体制を揺るがしかねない大状況の現象として位置づけられている。

恐慌という用語は価格メカニズムが需給を均衡させるはずとする予定調和説に立脚する現今の一般経済学教科書には登場しない。そこで歴史的事実を踏まえた経済学の流れに立った教科書的にいえば、モノが売れなくなり、デフレの中で人が余っ

てくる（失業）過剰生産を特徴とし、資本主義の内包する基本的矛盾の兆しとして把握される。このイミで、本書は古典的な恐慌論に立っており、不勉強な評者にとって、どこが従来の恐慌論と異なるのかを峻別するのは容易ではない。

しかし、幸いなことに、マルクス経済学エコノミストの伊藤誠が日本語版解説で、「資本の謎」の謎解きをしてくれており、彼によれば、マルクスの「資本論」での恐慌論の一側面を強調し、「支配的証明」をするのではなく、ハーヴェイの恐慌論は「貨幣資本の不足、労働問題、部門間の不比例、自然的限界、有効需要不足などをリストアップしている。・・・それは、マルクスに見られる多様な恐慌源を潜在的可能性の束として、多原因分析への道具箱」(353 ページ)として、資本主義の今を解説する手法であるとしている。

「南北問題」という地球規模の地理的不均等発展の講義を学部生に長らく教える評者に興味深い示唆を与えてくれた3つの点を記しておきたい。

1. 資本の地理学として

先ず第1は、何よりも、地理学者としてのハーヴェイが本書において、空間と時間の交差する場所 (place) からこの資本主義の危機的状況を記述できる力が本書で至るところで感じられることである。危機論は抽象度を増すほど、一見わかりやすいが、具体的なイメージを作りにくい。本書は、資本の流れがどのように地球を駆け巡り、どのような社会的景観を生んでいくかを随所で描写し、読者に資本の地理学の持つ臨場感を与えてくれることに成功している。

たとえば、第7章の「地理的不均等発展の政治経済学」では、アマゾン河からスコットランドなどを経て、台湾の山岳地帯まで、自然環境がいかんによって創造的に破壊されているかに言及し、第二の自然の歴史的背景を考察する。そこでは、地域の多様な自然が損なわれていく現象を単なる地誌として記述するのではなく、「第二の自然」の地理を生産し再生産している (233 ページ) 主要アクターである国家と資本に着目し、資

本蓄積の進化を地理的景観から読み取ろうとしている。その進化を考察するにあたり、ハーヴェイは、利潤を追って止まない資本の相互に関連し合う7つの「活動領域, spheres of activity, activity spheres」を設定して、識別することを提示している⁽³⁾。すなわち、①技術と組織形態、②社会的諸関係、③社会的・行政的諸制度、④生産と労働過程、⑤自然との関係、⑥日常生活と種の再生産、⑦世界に関する精神的諸観念、である。

この活動領域の多面的設定によって、資本主義が時とともにどうその領域間および領域内部の不均等発展していくかが、地理的に把握する (take place) ことが可能となる。この手法の特徴は、設定した領域間の関係を「因果関係ではなく、資本の流通と蓄積を通じた弁証法的な絡み合い」としてみて、「諸部分が全体の命令に厳密に調和する社会工学的機関」ではなく、むしろ「社会生態学的総体」(165 ページ) としてみようとする点にある。この不均等発展は当然ながら緊張と矛盾だけでなく、偶発性を抱え込みつつも**所変え、品変え**ひたすら利潤を追う資本が地理的にどう流れていくかのトポスを説明する強力な道具立てを与えてくれる由縁である。

2. 地理学の資本として

第2は、都市の位置づけである。ハーヴェイを初めて知ったのは彼の「ポストモダニティの条件」(吉原直樹訳、青木書店、1999年)であった。ポストモダニズムのアーバンデザイン写真や挿し絵を豊富に入れた同書は、都市におけるポストモダンな時間と空間の圧縮という概念から記述する手法に私は感心してしまった。プレモダンのアフリカで数年過ごし1980年代末日本に戻り、横浜市で大学で教えることとなり私はポストモダン建築に時々異邦人として向き合うこととなった。東京湾のお台場やみなとみらいに林立するポストモダン高層ビルの無機質性とバブル経済を支えた場所性を奪った記号中心の新古典派経済学との間に奇妙な親和性を感じていた私は、同書によるポストモ

ダニティの都市・都市化についての明快な読み方に多くを学ぶことができた⁽⁴⁾。

現代社会において都市とは何か。アフリカ地域研究者として、人文地理学による地域の記述に政治経済学からの分析から関心のあった私は、ある時から、現代アフリカの農村は、それ自体個体として存在するのではなく、いわば都市の付属物で、換言すれば、農村とは未だ都市になれないが、絶えず都市を目指す地域カテゴリーではないかと思うようになった。本書は、越境する資本がアフリカ地域での都市化を通して農村との関係をどのように自らの運動に合わせ、社会的に包摂していくかを考える切り口を示唆してくれている。

世界の都市が北も南も問わず、程度の差こそあれこれほど似通って来る時代はなかったのではないか。「都市空間の形成 (urbanization) は今日、世界の金融市場の統合によってますますグローバル化していく」(217 ページ) 現象はアフリカという世界でもっとも生産力が低い地域でも見いだされている。これはまた恐慌に対してもかつての大恐慌期と異なりアフリカ地域も対外的脆弱性を増していることを意味する⁽⁵⁾。「南」の農村の読み方は、グローバル経済下の都市空間の形成過程の中に位置づけることによってもより明確になるのだろう。

3. 変革のための社会科学として

第3は、本書が資本の流れの説明にとどまらず、それによって生まれる社会関係を、どう、誰が変えていくかという、厄介な問いまで提起していることである。

マルクスの資本論自体を精緻に解釈できる教員、研究者は、日本の大学にはまだ少なからず存在している。しかし、現代世界の変革の課題を自らの課題として設定し、キャンパス内マルキストを超えて、何を変革のためにすべきかを正面から問うマルキストはそんなに多くない。むしろ、私の周辺には、マルキストではないが、現代社会の矛盾に対して極めて明晰な分析をし、マルキスト知識人より強力な変革思想を提示する非マルクス

ト、例えば宗教者が存在していること私は知っている⁽⁶⁾。

こうした中で、ハーヴェイはマルキストとして、決してブレることのないマルクスの知の古典的技法を、その主たる知の生産現場たる大学から学生と世界を相手に発信・伝授している闘う知識人である。

この知的営為は、前述のハーヴェイが列挙した資本の7つの活動領域の一つである「世界に関する精神的諸観念」における変革を目的とする。彼はその必要性について日本の知的状況にも当てはまるので、少々長いが引用しておこう。

「われわれに必要なのは、世界を理解する新しい精神的諸観念である。だが、それはいったいかなるもので、誰がそれを生み出すのか？ より広範に知の生産の上に影を落としている社会学的不安と知的不安の両者を踏まえてこのことを考える必要がある。新自由主義理論と結びついた精神的諸観念が深く定着していること、大学が新自由主義化し法人化（corporatisation）していること、これらは現在の恐慌をつくり出す上で決して小さくない役割を果たした。たとえば、金融システム、その銀行部門、「国家－金融結合体」、私的所有権の権力、等々について何をなすべきかという問題は、伝統的思考の箱の外に出ないかぎり、しかるべく提起することはできない。そうするためには、金融機関それ自身の内部だけでなく、大学、メディア、政府といったきわめて多様な場所で思考における革命が起こることが必要だろう。」（294～295 ページ）

このように危機に直面する現代世界の仕組みを本書はリアルなタッチで解説している。読み終えて「資本の謎」は解けたかと自問してみると、自分の勉強不足も手伝いまだまだ穴だらけだ。ただ、一つのことはしっかりと確認できた。資本主義は「増長すること」なくして存続できないことだ。本書では年3%の複利的成長なくして資本主義は機能しないとしている。この成長の機能不全を更なる成長の再来を夢見て緊縮政策で乗り切ろうとするのか、それとも、別のロジックで⁽⁷⁾、世界の将来を置き換えていくのか、本書はこんな体制が

いつまでも続くはずがないと思う読者に更なる思考と行動を呼びかけている。

注

- (1) 同書簡は次の URL で読める。
<http://www.thomaspalley.com/?p=148>（閲覧日：2012年10月23日）
- (2) Tim Besley および Peter Hennessy の署名によるこの2009年7月22日の書簡は次の URL で読める。
<http://media.ft.com/cms/3e3b6ca8-7a08-11de-b86f-00144feabdc0.pdf>（閲覧日：2012年10月23日）
また、この資本主義の不確言性の指摘については、たとえばケインズ研究者平井俊顕氏の『ケインズは資本主義を救えるか－危機に瀕する世界経済』昭和堂、2012、を参照。
- (3) この概念装置を読んで直ちに評者が思い出したのは、レギュレーション・アプローチが提示した現代資本主義の制度分析で提示される5つの制度諸形態（formes institutionelles）である。この分析概念は、「蓄積体制」、「調整様式」、「発展様式」、「危機」といった他の概念装置とセットになっており、ハーヴェイの活動領域よりもはるかに狭い概念である。レギュレーション・アプローチの主たる分析対象は欧米日という歴史的先進国で、しかも一國資本主義の類型化（taxonomy）ないし資本主義の多様性（variétés de capitalisme）の識別に重点が置かれている点は同じ政治経済学のアプローチでも考察の主要対象と分析単位が同じではない。しかし、資本蓄積がいずれその危機状況に行き着くという問題設定は、両アプローチにおいて共通している。危機の性格と範囲が2つの政治経済学からどう互いに異なるのか、重なり合うのかは今後の課題としたい。
- (4) この違和感については研究メモとして以下の拙文を参照。勝俣誠「進歩と自律についての断章ノート－A. ゴルツの作品を手がかりに A note on progress and autonomy: with some reference to works of André Gorz」, 明治学院大学社会学・社会福祉学研究, (130), 明治学院大学社会学会, 2009年, 137-150 ページ。
- (5) たとえば、アフリカのセネガルではこの大戦間期に輸出用落花生栽培が減少したものの農民層は自給作物を増産する生存戦略をしばしばとった。
- (6) たとえば、カトリックの神学者であったイヴァン・イリイチが挙げられる。彼は、手段の発達で合理性を求めてきた現代世界がいつの間にか手段が自己目的化し、非生産的になったことを生涯問い続けた。
- (7) 資本主義と共産主義という二大体制を越えて共生主義（convivialism）の展望を問うものとして、たとえば勝俣誠／マルク・アンバール編著『脱成長の道－分かち合いの社会を創る』コモンズ, 2011がある。